

ウィトゲンシュタインによる科学の総合

(Wittgenstein's Integration of Sciences)

坂 恒 夫

(Tsuneo Ban)

1. はじめに

「語り得ないことについては、沈黙しなければならない」¹⁾。世界に生起するあらゆる事象を説明しようとする哲学に対して、世界を記述するあらゆる科学の基礎学であろうとする哲学に対して、ウィトゲンシュタインは、この様に宣言する。哲学は、語り得ないことを語る無意味な学であるというのである。哲学は、語り得ないことを語るまやかしの学であるというのである。この様なウィトゲンシュタインの思想は、科学の総合といかなる関係を持つのか。

科学の総合は、二つの契機から指向されるといえよう。²⁾一つは、目前に差し迫った行動を行なうに当たって行動が要求する様々な科学的知識を収集し関連づける科学の総合であり、一つは、未来の行動に備えて様々な分野で蓄積された科学的知識を一つの有機的関連を持った知識にしようとする科学の総合である。前者は、具体的事物の中で創造行為を行う技術から派生したシステム工学が得意とする科学の総合であり、後者は、具体的事物から離れて一般的・普遍的な関連を見出そうとする科学・哲学の科学の総合である。それでは哲学における科学の総合は、いかなる性格を持つのか。これをヘーゲルとフッサールの科学の総合にみてみよう。

ヘーゲルは、事象をより具体的に捉える普遍的・絶対的な学を求めることにより、論理学は有論—本質論—概念論の順に、自然哲学すなわち自然科学は力学—物理学—有機的自然学の順に、精神哲学すなわち人文社会科学は主観的精

神（人間学、精神現象学、心理学）－客観的精神（法、道徳、人倫）－絶対的精神（芸術、宗教、哲学）の順に総合性を増し、総合的な学となると主張する。また科学全体は、論理学－自然哲学－精神哲学の順に総合性が高まり、具体的で絶対的な総合学となるというのである。³⁾このようにヘーゲルは、社会および人間と関連づけて具体的に諸事象を記述する手法が総合であるとし、この総合観から諸科学を分類し総合度の順に諸科学を並べ、哲学が最も総合的な学であるとしたのだった。それではフッサールについてはどうか。フッサールは、諸科学は自らの成り立ちを忘れていて、諸科学は生活世界の上に成り立っている、と主張して、諸科学が社会および人間との生き生きした繋りを取り戻すには、日常的客観思考すなわち科学的思考を廃し、生活世界における科学の成り立ちを明らかにする現象学的思考を諸科学の中心に据えねばならぬと説く。⁴⁾フッサール現象学が明らかにした諸科学の成立基盤となる生活世界の属性は、身体性、時間性、相互主観性であった。理念化・法則化・因果化等の科学的営為は、人間の身体を介した振る舞いの中で、未来から過去へと流れる現在の時間の中で、他人と私が相互に働き掛ける社会の中で営まれるのである。このような生活世界に戻ってのみ、諸科学は相互の繋りを取り戻し、共通の基盤を持った一つの科学として総合されるというのである。

ウィトゲンシュタインによる思想も哲学の分野に属するものである。ウィトゲンシュタインの思想は、いかに諸科学を総合するのだろうか。ヘーゲルは、諸科学を総合度の順に分類し、総合度が高い科学が総合度が低い科学を総合する、としたのだった。一方フッサールは、諸科学が成り立つ共通の基盤を明らかにすることにより、諸科学を一つの総合的なものにしたのだった。ウィトゲンシュタインによる科学の総合は、いかなる性格を持つのだろうか。冒頭に挙げたウィトゲンシュタインの言葉「語り得ないことについては、沈黙しなければならない」から推察されることは、語り得ない学と語り得る学があることである。語り得ない学、語り得る学とは、いかなる学だろうか。語り得る学は、いかにして語るのだろうか。語り得ない学は、何を語っているのだろうか。この諸科学の分析を通して、諸科学がいかに総合されるのだろうか。これらを論

じることが、本稿の主旨である。

2. ウィトゲンシュタインの生涯

「語り得ないことについては、沈黙しなければならない」と述べて哲学的思考の限界を説いたウィトゲンシュタインは、「示され得るものは、語られることができない⁵⁾」と述べて、哲学的対象が現われる形態をも明らかにしたのだった。ウィトゲンシュタインの思想も、真偽を実証的に決められぬもの故、語り得ぬものであろう。それは示されるに過ぎぬものであろう。それは何処に示されるのだろうか。それはウィトゲンシュタインの生において示されるのではないだろうか。ウィトゲンシュタインの思想は、ウィトゲンシュタインの生が語るのではないだろうか。ウィトゲンシュタインの思想の詳細をみる前に、ウィトゲンシュタインの生涯の簡単なスケッチを試みようと思う。⁶⁾

ルートウィッヒ・ヨセフ・ヨハン・ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein) は、1889年 4月26日、オーストリアのウィーンで生まれた。ユダヤ人であった父、カール・ウィトゲンシュタインは、少年時代にアメリカに渡り放浪生活を送った後、オーストリアに帰り鉄鋼会社の経営に参加して、大成功を収めていた。ウィトゲンシュタイン家は、アメリカのカーネギー、ドイツのクルップと並ぶ、鉄鋼経営の名門であったのである。そんなウィトゲンシュタイン家の末っ子として、ルートウィッヒ・ウィトゲンシュタインは生まれた。ルートウィッヒには、兄四人、姉三人の兄弟がいたが、いずれも父親の生業には全く関心を示さず、音楽・絵画などの芸術の分野に興味を持つのだった。この様な精神の志向と、それを拒絶する家族との葛藤からか、ルートウィッヒの兄弟には自殺者が相次いだ。長兄ハンスは1902年、二番目の兄クルトは1918年、三番目の兄ルドルフは1904年、それぞれ自殺して果てた。一方、ルートウィッヒと共に自殺しなかった四番目の兄パウルは、リヒャルト・シュトラウスやモーリス・ラベルなどの作曲家から曲を贈られるなど、コンサート・ピアニストとして大成功をおさめた。また、三番目の姉マルガレーテも、画家グスタフ・クリムトのモデルとして絵画史に名を残すなど、芸術・思想の分野で活

躍するのである。このようにルートウィッヒ・ウィトゲンシュタインの周りには、死・芸術・異常な愛という世紀末の雰囲気漂っていたのだった。

子供の自殺の原因は家庭教育にあるとする父カールの反省から、またルートウィッヒ自身工作が好きだったことから、1903年から1906年にかけてリンツの実業学校に、1906年から1908年にはベルリンのシャルロッテンブルクにある工科大学に行くことになる。次いで1908年イギリスに渡り、マンチェスター大学の工学部の研究生となって、航空工学を専攻し、プロペラの研究に打ち込むのである。

知的興味が応用数学から数学基礎論に移ると、ウィトゲンシュタインは、論理学者フレイゲをイエナに訪ねる。だがフレイゲからは、バートランド・ラッセルの下で研究するよう勧められる。フレイゲの勧めに従って、ウィトゲンシュタインは、1912年、ラッセルが講師を勤めるケンブリッジのトリニティ・カレッジに、初めは学部学生として、後には大学院学生として、籍を置くことになる。この様に始まったラッセルとの関係は、単なる師弟の関係ではなく、気質の違いに激しく反発し合いながらも、持ち合わせぬ互いの才能に激しく惹かれるとも言える関係だった。このラッセルとの交わりを通して、ウィトゲンシュタインは、論理学の知識を吸収し、後に『論理哲学論考』として結実する論理学研究の基礎を確立するのである。

1913年、父カールが癌で亡くなる。ウィトゲンシュタインは、莫大な遺産を相続するが、父親が芸術家に果たした倫理的義務を自分も果たそうと思い、遺産の三分の一をオーストリアの芸術家に寄付することにする。寄付を受ける芸術家のリストには、詩人のゲオルク・トラークルやライナー・マリア・リルケ、画家のオスカー・ココシュカの名があったという。

1914年、第一次世界大戦が始まったとき、ウィトゲンシュタインは、オーストリアに滞在していた。ヘルニアを患っていたウィトゲシュタインは、兵役につく義務はなかったが、志願し、オーストリア・ハンガリー軍に入隊する。志願した理由は、オーストリアへの愛国心もあったが、死への願望もあったという。兄と同じように、自殺するかもしれない、自殺するべきである、という恐

怖感が入隊を誘ったというのである。だが、兵卒としてウィトゲンシュタインの活躍は目覚ましく、入隊時の地位は低かったが、数々の武勲で勲章をもらい、1918年には尉官にまでなるのである。1918年11月、オーストリア・ハンガリー軍が降伏すると、ウィトゲンシュタインは、捕虜となりイタリアの収容所に入れられる。捕虜になったとき、ウィトゲンシュタインの背囊には、主著『論理哲学論考』の原稿が仕上がっているのである。

『論理哲学論考 (Tractatus Logico-Philosophicus)』(以下、『論考』と略記する)は、哲学の諸問題は言語の誤用に起因することを述べたものであるが、内容の詳述は後にして、ここでは出版の経緯から述べることにしよう。戦争の中で完成した『論考』を、ウィトゲンシュタインは、戦場から出版社に送るが、すべて拒絶される。ウィトゲンシュタインからの手紙で窮状を知ったラッセルは、『論考』の内容を解説するラッセルの序文をつけて出版することを提案するが、ウィトゲンシュタインは、序文は『論考』を理解していないとして拒否する。しかし自身の出版の努力がすべて失敗すると、ウィトゲンシュタインはラッセルの提案に従うのである。1922年に出版された『論考』は、論理実証主義の指導者シュリックに深い感銘を与え、これ以後『論考』は、論理実証主義の理論的基盤となるのである。

ウィトゲンシュタインにとって『論考』は、すべての哲学的問題を解消する著作であった。『論考』を完成したウィトゲンシュタインにとって哲学に留まる理由はなくなる。ウィトゲンシュタインは哲学を捨てて、小学校教師になろうとする。『論考』が述べる語り得ぬものを、小学校教師になって、人生において示そうとしたのであった。教員養成学校を経て、ウィトゲンシュタインは、1920年から1926年にかけて小学校教師になる。しかしながら自己の信条に忠実に生きざるを得なかったウィトゲンシュタインは、生徒の親からの頑強な抵抗にあう。ウィトゲンシュタインの理念的で革新的な教育は、親たちの世俗的な期待の反発を受けたのだった。ウィトゲンシュタインは、挫折感で打ちひしがれて、教師の職を辞すことになるのである。

気落ちしたウィトゲンシュタインを、すぐ上の姉マルガレーテ・ストンボロ

ウ夫人は、自宅の新築を手伝わせることで励まそうとする。さらにマルガレーテは、シュリックとの仲と取り持つ等をして、ウィトゲンシュタインを哲学に戻そうとする。マルガレーテの労が効を奏したのか、1929年、ケンブリッジに戻ることになる。まずウィトゲンシュタインはケンブリッジに研究生として登録される。ついで『論考』が学位論文として提出されてPh. D. を得、1930年から1935年にかけてトリニティー・カレッジのフェロー（特別研究員）となるのである。ウィトゲンシュタインの講義は、受講者に強烈な印象を与えたという。ウィトゲンシュタインは、受講者の前で思索するのだった。ノートや準備なしで講義が行なわれ、思索に行き詰まると突然に中断し、説明であったものが突然に疑問となり、その疑問は受講者に向けられるのだった。

フェローの任期が切れて後、1936年から1937年の一年間、ウィトゲンシュタインは、ノルウェーの寒村の小屋に引きこもる。ここでウィトゲンシュタインの第二の主著『哲学探究 (Philosophische Untersuchungen)』（以下、『探究』と略記する）の執筆が始まる。『探究』においてウィトゲンシュタインは、『論考』の基本的な仮定を捨て、詳細は後述するが、言語の意味は言語ゲームで決まるとする新説を主張するのである。ケンブリッジに戻ったウィトゲンシュタインは、1938年、オーストリアがドイツに併合されるとイギリスに帰化する。そして1939年には、ケンブリッジで長年の友人であったG・E・ムーアの後を継いで、哲学講座の教授となるのである。しかし、その地位に正式につく前に第二次世界大戦が始まり、ウィトゲンシュタインは、第一次世界大戦のときと同じく、自ら志願し、病院・医学研究所で献身的に働く。1944年に戦争が終ると、ケンブリッジの大学教授として、週二回のゼミナールを行なう。ゼミナールの課題は、『探究』の諸問題についてのものだったという。だが、大学教授は不誠実であらざるを得ないとして、その地位に疑問を感じていたウィトゲンシュタインは、1947年、大学に退職を願い出る。ウィトゲンシュタインにとって人生は、自己の哲学の語り得ないもの、すなわち示されるものだった。ウィトゲンシュタインは、思索において採った厳格な態度を、人生においても採ろうとしたのだった。

哲学に専念しようとするウィトゲンシュタインは、孤独が保たれる思索の場所を求めてアイルランドを点々とする。そんな中で『探究』の原稿が完成するが、同時に彼の健康に影が差し始める。ウィトゲンシュタインは、気力が失せて仕事はかどらない、としきりに訴える。それでも、癌を患う姉ヘルミネを見舞って、1948年、ウィーンへ行ったり、友人N・マルコム¹⁾の招待を受けて、1949年、アメリカへ行ったりするのである。やがて自分の病が前立腺癌であることが分かる。するとウィトゲンシュタインは、ケンブリッジの友人に会ったり、ウィーンの親戚を訪ねたり、ウィーンに残してあったノートを破棄したりする。素直に死を受け入れようとするのである。長い間自殺の誘惑に抗してきたウィトゲンシュタインは、これ以上の生を望んでいなかったのである。病が進んで死が近づいたことを悟ると、医師E・ベヴェンの家に住むことになる。1951年、ウィトゲンシュタインに死が訪れる。言い残した言葉は「私がすばらしい人生を送ったと彼らに伝えて下さい」であったという。

3. ウィトゲンシュタインの思想

以上の生涯の略述から分かるように、ウィトゲンシュタインの思想の骨格は、『論考』と『探究』の二つの著作にあるといえよう。ウィトゲンシュタインは、『論考』で個性的な思索を展開し、『探究』でその修正・発展を行ったといえるだろう。ここで、ウィトゲンシュタインの思想の概略を、『論考』と『探究』の中に辿ることにしよう。²⁾

『論考』は何を語ろうとしたのか。ウィトゲンシュタインは、この書の趣旨は「ともあれ語られ得るものは明らかに語られ得る、そして論じ得ぬものについては沈黙せねばならぬ」を示すことにある、と序文で述べる。それでは人間はいかに語るといえるのか。事物および事物の結び付きである事態は、いかに語られるのか。ウィトゲンシュタインは、事物および事態は何らかの記号を使って語られる、という。事物の記号が「名」で、事態の記号が「命題」であり、記号である「名」と「命題」を事物と事態に対応づけることが言語における語ることだという。すなわち言語という記号によって事実の絵 (Bild) を描くこ

とが語ることだというのである。音楽家は旋律という記号によって、詩人は言葉という記号によって、画家は色と形という記号によって、事実の絵を描くと同じように、言語を操る人間は言語という記号で事実の絵を描くというのである。それでは人間の言語表現の論理を研究する論理学者は何を行なっているのか。ウィトゲンシュタインは、論理学者は事実の論理絵 (logisches Bild) を描いているとする。言語表現の中の論理形式を探ることにより、事実の基礎画ともいえる論理絵を描いているというのである。

ところで絵は、いかにして描かれるものを描出するのか。それは描かれるものの構造と同じ構造の模写形式 (Form der Abbildung) を持つことによってである。絵は、模写形式の中に描かれるものを映すことによって、描出するのである。では、絵は絵自身の模写形式を描出することができるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、これは不可能だと主張する。事物を見る眼が眼自身を見ることができないように、絵は絵自身の模写形式を描出することはできないと主張するのである。絵の模写形式は、描かれるものではなくして、描かれた絵の中に示されるものだということである。模写形式は、絵を描くことを通して、示されるということである。これを言語表現に適用してみよう。言語を用いて言語について語ることができるのだろうか。言語は言語表現の模写形式であろう。すなわち言語は自らの模写形式である言語については語れぬことになる。言語は、言語について語ることはできず、言語の使用を通して、自らを示すのみなのである。

ところで論理絵は、言語表現等のあらゆる人間の表現活動の基礎画というべき、論理学者が描く論理による絵であった。論理絵は、人間の論理的行為を貫く、論理を素材とする絵なのである。論理絵は、いかなる構造を持っているのか。これを言語表現を例に見てみよう。表現すべき事態は、通常、数多くの要素的事態から構成される複雑な事態であろう。言語表現の上で事態に対応するものは命題である。すなわち複雑な事態を表現する命題は、要素的事態を表現する要素命題から、構成されることになろう。命題とは、事実と合致すれば真、合致しなければ偽、となるものである。複雑な事態を表現する複合命題は、個々

の要素命題が真・偽となるに応じて、真・偽となるものである。すなわち複合命題は要素命題を変数とする関数であることが理解できよう。要素命題は複合命題の真理変数 (Wahrheitsargument) であり、複合命題は要素命題の真理関数 (Wahrheitsfunktion) なのである。ウィトゲンシュタインは、真理関数には三つの種類があるという。第一のものは、要素命題の真・偽に応じて真・偽の値を取るものであり、第二のものは、要素命題の真・偽にかかわらず真となるものであり、第三のものは、要素命題の真・偽にかかわらず偽となるものである。第一の種類の真理関数が表わす命題は、要素命題が事実と合致するか否かで真・偽が決まるもので、経験的事実に依存する経験科学の命題である。一方、第二と第三の真理関数は、それぞれ恒真命題 (Tautologie) および矛盾命題 (Kontradiktion) と呼ばれ、経験的事実に依存せぬ論理学の命題である。ウィトゲンシュタインは、論理学で議論すべき命題を恒真命題と矛盾命題に限り、これらの命題が言語表現で使用される論理の構造を示すというのである。ウィトゲンシュタインは、経験科学に属する命題と、論理学に属する命題とを、明確に区分するのである。

晩年に書かれて死後に出版された『探究』において、ウィトゲンシュタインはいかなる思想を展開したのか。『探究』における新しい主張には「言語の本質は言語ゲームにある」と「私的言語は不可能である」の二つがある。『論考』の論理絵の理論においては、個々の要素命題が明確な意味を持ち、この意味が要素命題の集りである複合命題の意味を確定したのだった。だが『探究』の言語ゲームの理論においては、言語の意味は言語ゲームの中で確定するとされる。言語の意味は、言語が使用される活動の場で、言語が交差する言語生活の中で、確定するというのである。言語の意味は、人間の行動を離れては理解できないというのである。例えば、あなたが「赤いりんご五つ」と書いた紙を果物屋に見せたとする。ウィトゲンシュタインが言うように、果物屋は即座に真っ赤なりんご五つをあなたに渡すだろう。果物屋は、「赤い」・「五つ」等の意味をどのように理解し、あなたにりんごを渡すのだろうか。ウィトゲンシュタインは、果物屋は言語の意味を理解し、その後、行動するのではないとする。果物

屋は言語の使い方を知っているのである。果物屋は、言語の使い方を知っていて、紙を見てりんごを渡したのである。果物屋は、果物の商いの中で、すなわち言語ゲームの中で、言語の使い方を学習し、あなたにりんごを渡したのである。言語の解釈は、言語ゲームの中で、行なわれるのである。言語の意味は、言語の使用法なのである。

「痛み」という言葉の意味を、人間はいかなる手法で知るのだろうか。痛みの個人的体験を下に、「痛み」の意味を知るのだろうか。痛みを体験するとき、「これが痛みだ」と自らを納得させることによって、「痛み」の意味を知るのだろうか。ウィトゲンシュタインは、このような私的言語はあり得ないと主張する。他人の痛みを私は感じるができない。すなわち他人の痛みを、これが以前私が感じた痛みだと、私は同定することができない。したがって他人の痛みの振舞を見て、「あの人が痛みを感じている」と言えないのである。私の痛みの体験によっては、「痛み」の意味が確定しないのである。私的な定義によっては、言語は成り立ち得ないのである。話し手しか知り得ないものを指示対象とする言語は、存在し得ないのである。言語の意味は、言語ゲームの中で、決まるのである。言語の使用者が参加する言語ゲームの中で、言語の具体的な使用の中で、言語の意味が決まるのである。私的言語は、不可能なのである。

4. ウィトゲンシュタインにおける諸科学

以上の議論から分かるように、ウィトゲンシュタインの最も独創的な主張は、『論考』の中にあるといえよう。ここでは『論考』の主張を核に、他の著作での主張を参考にして、ウィトゲンシュタインの視点から眺めると、論理学・数学・自然科学等の諸科学が、いかなる性格を持つことになるかを考えることにしよう。

(1) 論理学

ウィトゲンシュタインは、論理学について次のように述べる；「論理学の命題は恒真命題である⁸⁾」、「論理学の命題は何も語らない（それらは分析的命題である）⁹⁾」、「論理学の命題が真であることはシンボルだけから認識できる。…

…一方、論理学に属さない命題の真偽は命題だけからは認識できない¹⁰⁾、「論理学の命題は経験によって確証することも反駁することもできない¹¹⁾」、「論理学の命題は、諸命題を結合して何も語らない命題にすることによって、それらの諸命題の論理的性質を明示する¹²⁾」、「論理学の命題は、世界の足場を記述する、というよりも、それを描出する。論理学の命題は、関わるべき何ものも持たない¹³⁾」、「論理学には、驚きはあり得ない¹⁴⁾」、「論理命題の証明は、恒真命題を産出する或る操作の継続的適用によって、他の論理命題から当命題を生ぜしめる、という点にある¹⁵⁾」、「論理学の証明は、複雑な恒真命題をより容易に認識するための、機械的補助手段にすぎない¹⁶⁾」、「論理学の命題は、いずれも証明の形式である¹⁷⁾」、「論理学では、各々の命題が自己自身の証明である¹⁸⁾」、「論理学の全命題は、同等の権能を持つ¹⁹⁾」、「論理学は学説ではなく、世界の鏡像である²⁰⁾」。

これらの主張から分かるように論理学は、現実を模写するための模写形式を論ずる学なのである。絵画・言語・思考等で、現実を捉えるためには、すなわち現実を模写するためには、現実と模写するものとの間に共通の形式がなければならない。この共通の形式が模写形式である。論理形式は、模写が模写である以上必ず持たねばならぬ模写形式、すなわち最も普遍的で基礎的な模写形式であり、論理学は、この論理形式を論ずる学なのである。論理学は、人間が現実を思考するとき、人間が現実と共有する論理形式を、論ずる学なのである。論理形式は、人間の思考を貫く形式であるから、思考の対象の全てを貫く形式、すなわち世界そのものの形式である。論理形式は世界の論理形式であり、世界は論理形式の世界なのである。世界の境界は論理形式の境界であり、論理形式の境界は世界の境界なのである。論理学は、このような論理形式を論ずる学なのである。

それでは論理形式は、いかに把握されるのか。論理形式は最も根源的な模写形式である。ウィトゲンシュタインの絵の理論によると、絵は、模写形式の外に立つことができず、模写形式を模写できないのだった。模写形式は、描かれた絵の中で、示されるのである。同様に論理形式も、言語によっては記述でき

ず、記述された命題の中で、示されるのである。論理形式は、語られるものではなくして、示されるものなのである。それでは示されるものである論理形式を、論理学はいかに捉えるのか。論理形式は、語られるものの中で示される、すなわち命題の中で命題の構造として示されるのである。論理形式は、命題としては表現されず、命題の構造として示されるのである。この事実を象徴的に表わすものが、恒真命題と矛盾命題である。要素命題の真偽に応じて真と偽の値をとる通常の命題に対して、恒真命題と矛盾命題は要素命題の真偽にかかわらず真あるいは偽の値をとる命題である。通常の命題は事実を記述する有意義な命題であるのに対して、恒真命題と矛盾命題は事実を記述しない無意義な命題なのである。だが恒真命題と矛盾命題は、論理形式を示すのである。恒真命題と矛盾命題を満たす論理形式であるとして、論理形式を示すのである。恒真命題と矛盾命題は、何も語らない代わりに、論理形式を示すのである。

論理学には、ある命題から他の命題を導き出すという、論理的証明がある。論理的証明とは何だろうか。論理学の命題は、論理形式を示す恒真命題と矛盾命題であった。恒真命題は、論理的否定により矛盾命題に変わるから、「論理学の命題は恒真命題である」といえよう。すると論理学の証明とは、ある恒真命題に、常に恒真命題を生ずる論理操作を施し、他の恒真命題を導き出すこととなる。論理学の証明とは、ある恒真命題を他の恒真命題に変えることなのである。論理学の証明は、恒真命題の形を変えるだけなのである。論理学の証明においては、出発点と到達点は同値なのである。論理学においては、驚きはないのである。

(2) 数学

数学については、次のように主張する；「数学は論理的方法である」²¹⁾、「数学の命題は等式である」²²⁾、「数学は等式で仕事を行なう」²³⁾、「数学の命題は疑似命題である」²⁴⁾、「数学の命題は思想を表現しない」²⁵⁾、「世界の論理を、論理学は恒真命題で示し、数学は等式で示す」²⁶⁾、「数学が等式に至る方法は代入法である。等式は二つの表現の置換可能性を表現している」²⁷⁾、「等式は別々の操作が同一の結果をもたらすことを示す」²⁸⁾、「算術の等式は、恒真命題に置換で

きない²⁹⁾、「数学の証明において肝要なのは、見渡しがきくことである³⁰⁾」、「数学の証明は、一定の結果が出ることの範型である³¹⁾」、「数学の証明は、相互理解に役立つ³²⁾」、「数学の証明は、新たな連関を設け、それらの連関の概念を作り出す³³⁾」、「数学のシンボルはいかなる意味も持たない³⁴⁾」、「計算における動作は、ゲームにおける動作に対応する³⁵⁾」、「数学においては、すべてが算法で、意味は何もない³⁶⁾」、「数学者は発明者であって、発見者ではない³⁷⁾」、「数学は、問いと答えを含む言語ゲームを教える³⁸⁾」。

以上の主張からウィトゲンシュタインは、数学を論理学に近いとしながらも、異質なものとしていることが理解できよう。論理学の命題は、何も語らない命題、経験に依存しない命題、事実と関係しない命題であった。論理学の内容である論理形式は、事実を模写する模写形式であり、意味を持たないものであった。数学の命題も、論理学と同じく、事実と関係せぬ疑似命題だといっているのである。数学の命題も、何も語らぬ、すなわち思想を表現せぬ命題だといっているのである。世界の論理が、論理学では恒真命題で示されるのに対し、数学では等式で示されるというのである。このことは、数学の計算・証明・研究が、経験との対応なく行なわれること、新しい経験的事実の発見とはならないこと、をみれば理解できよう。数学は、経験を受け入れる思考の枠組を、等式で研究する科学なのである。

思考の枠組を、論理学が恒真命題で示すのに対し、数学は等式で示すという違いは、数学を論理学とは違った性格のものにすると主張する。論理学の恒真命題が、もともと命題が保持していた構造を明るみに出すという消極的意味しか持たないのに対し、数学の等式は、構造が異なる二つのものが等しいことを示すという積極的意味を持っている。数学の等式は、内容が異なる二つの命題に対して、等しいものであると宣言している。例えば、 $7+5 = 3+9$ を考えてみよう。 $7+5$ と $3+9$ は、二つの異なった操作を表わし、内容が異なるものである。この異なった二つのものを、等式は等しいと宣言し、二つのものに新しい意味を与えるのである。この論理学と数学の違いは、論理学的証明と数学的証明にも現われているという。論理学的証明が、正しい推論規則の適用と

いう狭い応用可能性しか持たないのに対して、数学的証明は、代数・確率・微分・積分などの証明体系に発展し多面的な応用可能性を持っている。まさに数学は、等式をもって、仕事をするのである。この数学の応用性の高さは、数学的証明の性格に起因するという。数学的証明は、証明の手続きがはっきり見えて見渡しがきく、現実の変化の比較対象（範型）として用いられる、新しい連関を見出しその概念を形作る、などの性格を持っている。これらが数学の応用性を高めているというのである。

この数学の性格は、いかに捉えたらよいのだろうか。数学は、この性格をいかに得たのだろうか。ウィトゲンシュタインは、数学を理解するモデルとしてゲームを提示する。例えば、チェスのゲームを考えてみよう。チェスの駒をチェスの規則に従って動かしゲームをするのと同じように、数字を計算規則に従って動かし計算をするというのである。チェスの規則がゲームをするための規則であるのと同じように、計算規則すなわち数学は計算をするための規則だというのである。チェスの規則がゲームという人間の活動のためにあるように、数学は計算という人間の活動のためにあるのである。ゲームにおける動作は、計算という動作に対応するのである。この数学の実用性・技術性が、数学の応用範囲を広いものになっているというのである。また数学のゲーム・モデルは、他の数学の性格も説明するとする。例えば「このような計算規則をなぜ用いるのか」の疑問は、「このようなゲームの規則をなぜ用いるのか」の疑問と同じく、意味がないのである。計算規則は、任意で、基礎づけられないのである。また数学では、矛盾が生じると新しい公理を加え、新しい数学を作ることによって対処するが、これも、ゲームで矛盾が生じると、新しい規則を加え新しいゲームにして、ゲームを続行することから説明されるという。

(3) 自然科学・物理学

自然科学・物理学については、次のように述べる；「真なる命題の総体が、自然科学の総体である³⁹⁾」、「因果関係の信仰は、迷信である⁴⁰⁾」、「事物にア・プリオリな秩序はない⁴¹⁾」、「論理学の外では、すべては偶然である⁴²⁾」、「帰納法則は、有意義な命題であり、論理法則ではない⁴³⁾」、「因果法則は、法則では

なく、法則の形式である⁴⁴⁾、「因果法則、最小作用の法則等の命題は、科学の命題を形式化するための、ア・プリオリな洞察である⁴⁵⁾」、「力学は、世界記述の形式の一つを規定している⁴⁶⁾」、「力学は、世界記述のために必要とする全ての真なる命題を、一つの計画に従って構成しようとする試みである⁴⁷⁾」、「物理学の法則は、論理的機構を通して、世界の対象について語っている⁴⁸⁾」、「因果法則があるとすれば次のものになろう——自然法則が存在する。だが、それは語り得るものではなくして、示されるものである⁴⁹⁾」、「どのような過程も、時間の経過と比較することはできない。別な過程と比較できるだけである⁵⁰⁾」、「帰納という手続きは、経験と同調する法則のうちの最も単純な法則を承認する、ということにある⁵¹⁾」、「現代世界観の根底には、自然法則が自然現象を説明している、という錯覚がひそむ⁵²⁾」、「論理的な必然性だけが存在するように、論理的な不可能性だけが存在する⁵³⁾」。

上述から分かるように、ウィトゲンシュタインは、自然科学の命題こそが、事実を語る命題だと主張する。論理学の命題が、何も語らず、語る形式を示すに過ぎないのに対して、自然科学の命題は、事実と対応し、世界について語っているというのである。論理学の命題が、経験と関係せぬ、無意義な命題であるのに対して、自然科学の命題は、経験の検証を受ける、意義のある命題だというのである。自然科学において初めて人間は、語るべき対象を持つのである。自然科学において初めて人間は、世界についての知識を得るのである。

それでは自然科学は、いかに自然を語るのだろうか。これを物理学について見てみよう。物理学は、いかに自然を記述するのだろうか。物理学は、自然の現状をそのまま記述するのではない。そのような自然科学も生物学の一部にはあるが、物理学は自然法則の形で自然を記述する。物理学は、絵画のように自然を模写するのではなく、自然法則に抽象して自然を記述するのである。自然法則とは何だろうか。自然法則と論理法則は、性格が異なるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、論理法則は必然性を持つが、自然法則は偶然的なものだという。論理法則はア・プリオリな必然性を持つが、自然法則は状況に応じて真偽が変わる偶然的なものだという。常に成り立つと思われた自然法則が、必

然性を持たぬ偶然的なものだということのである。ウィトゲンシュタインにとって、論理法則だけが必然性を持ち、論理法則でない自然法則は、状況に依存する通常の命題に過ぎないのである。自然法則は、単に真である確率が高い通常の命題に過ぎないのである。

自然科学には、固有の法則として、因果法則・帰納法則がある。これらは、いかなる性格の法則なのだろうか。ウィトゲンシュタインは、因果法則は存在しないという。因果法則は、現在の事象から未来の事象が推論可能とする法則だが、このようなことは不可能だということである。確実な推論は論理学においてのみ可能で、自然科学においては、現在と未来の事象を命題と対応させてのみ、命題の真偽が確定するというのである。帰納法則についてはどうだろうか。帰納法則についても、ウィトゲンシュタインは、論理法則ではないから、事象と対応させて初めて真偽が分かるものであり、確実なものではないということである。ところで因果法則・帰納法則は、運動法則・熱力学法則等の具体的事象の法則とは、性格が異なっている。因果法則・帰納法則は、法則の法則あるいは科学一般の法則と呼べるものである。両者はいかなる関係にあるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、因果法則・帰納法則は法則の形式であるという。これらの法則は、事象と関連づけて議論されるものではなく、個々の自然科学の法則の中で、示されるものなのである。もし因果法則・帰納法則が存在すれば、自然科学の個々の法則がそれを示している、ということである。だがウィトゲンシュタインは、因果法則・帰納法則は存在しないという。因果法則・帰納法則は、科学の命題を形式化するための、便宜的なものに過ぎないということである。

(4) 倫理学・人間学

倫理学・人間学については、「世界は私の世界である」⁵⁴⁾、「世界と生とは一つである」⁵⁵⁾、「私は私の世界である」⁵⁶⁾、「思考し表象する主体は存在しない」⁵⁷⁾、「主体は世界に属さない。それは世界の限界である」⁵⁸⁾、「世界は私の意志に依存しない」⁵⁹⁾、「すべての命題は等価値である」⁶⁰⁾、「倫理学の命題は存在しない」⁶¹⁾、「倫理学は超越的である」⁶²⁾、「倫理学と美学とは一つのものである」⁶³⁾、「幸福なるものの世界は、不幸なるものの世界とは、全く別のものである」⁶⁴⁾、「死に

際して、世界が変わるのではなく、世界が終るのである⁶⁵⁾、「死は生の出来事ではない。人は死を体験しない⁶⁶⁾」、「われらの生に終りはない。われらの視野に限りがないように⁶⁷⁾」、「時間空間の中での生の謎の解決は、時間空間の外にある⁶⁸⁾」、「生の問題の解決を人が認めるのは、問題が消え去ることによってである⁶⁹⁾」と主張する。

論理中心主義のウィトゲンシュタインにとって、行為主体すなわち「私」とは何だろうか。客観科学の認識論のように、考察の外に置かれているのだろうか。ウィトゲンシュタインは、私は私の世界である、世界は私の世界である、世界と生は一つである、と主張する。ウィトゲンシュタインは、論理空間における事実の総体が世界であると定義するが、この論理的世界が、私の世界であり、私の生であり、世界そのものでもある、というのである。ウィトゲンシュタインによれば論理形式は、命題あるいは言語の中に自らを示しているのだった。同様に「私」も、命題あるいは言語が、私の命題・私の言語であることから、これらの中に自らを示しているというのである。私の言語の領域が、命題の領域すなわち世界の領域であることから、世界は私の世界であるというのである。このようにウィトゲンシュタインにとって「私」は、命題によって語り得るものではなく、命題の中に示されるものなのである。「私」は、世界の中に存在するものではなく、世界の境界として存在するものであり、超越的なものだということである。

ウィトゲンシュタインにおいて、倫理学はいかなる位置を占めるのだろうか。命題は行なうべき行為を指示できるのだろうか。ウィトゲンシュタインは、命題はすべて等価値であると宣言する。行なうべき行為を指示する命題は、すべて等価値だということである。論理空間に位置する命題は、すべて等価値であり、行為を指示できないということである。すなわちウィトゲンシュタインにとって、倫理学の命題は存在しないことになる。だが現実の世界には、倫理問題が存在する。ウィトゲンシュタインは考える、もし倫理学の命題があるならば、それは世界の外側でなければならない。倫理学の命題は、世界の外側に存在する、超越的なものだということである。ウィトゲンシュタインにとって、倫理学の命

題は、記述される世界の外側にある、語り得ぬものなのである。

ここで再び「私」と世界の関係を考えてみよう。ウィトゲンシュタインにとって、世界は私の世界であった。私は、様々な意志を持ち、様々な情感を持っている。私は、他人とは違った意志・情感を持っている。これは私の世界のどこに現れるのだろうか。ウィトゲンシュタインにとって、「私」は世界の境界であった。すなわち私と他人の違いは、世界の境界の違いとして現われることになる。私と他人とは、世界の領域が違ふのである。幸福な人と不幸な人は、異なる世界に住むのである。また「私の死」とは何だろうか。「私の世界」の私にとって「私の死」とは何だろうか。ウィトゲンシュタインは、死とは世界の終りであるとする。「私の死」とは、私の世界が終ることなのである。だが私は、私の世界であった。私の世界があって初めて私があるのである。すなわち私は、私の死を体験できないことになる。体験できないことは存在しないことである。すなわち「私の死」は存在しない、「私の生」には終りが無いことになるのである。

(5) 哲学

哲学については、「哲学的な命題の大部分は非意義的である⁷⁰⁾」、「すべての哲学は言語批判である⁷¹⁾」、「哲学の目的は思想の論理的な明晰化である⁷²⁾」、「哲学は学説ではなく活動である⁷³⁾」、「哲学は自然科学が論議可能な領域を限界づける⁷⁴⁾」、「哲学は思考不可能なものを、内側から思考可能なものによって、限界づけねばならない⁷⁵⁾」、「哲学は、語り得ることを明晰に描出することによって、語り得ぬことを意味するであろう⁷⁶⁾」、「自我は、世界は私の世界であるということを通して、哲学の中に入ってくる⁷⁷⁾」、「表明できない解答に対しては、問も表明することができない。謎は存在しない⁷⁸⁾」、「表明し得ぬものが存在する。それは自らを示す。それは神秘的なものである⁷⁹⁾」、「哲学の正しい方法は、語られ得ること、従って自然科学の命題、従って哲学とは何の関係もないこと、これ以外の何も語らない、というものである⁸⁰⁾」、「哲学の命題が何事かを解き明かすとすれば、それを通してその上に行きそれを乗り越え、それを無意義と認識することによってである⁸¹⁾」、「語り得ないことについては、沈黙しなければ

ばならない⁸²⁾、「哲学におけるあなたの目的は何か。蠅に蠅取壺からの抜け道を教えること⁸³⁾」と述べる。

哲学はいかなる役割を持つのだろうか。ウィトゲンシュタインは『論考』の序論で、「本書の意図は思想の表現に境界線を引くことである」と述べる。いかなる境界線であろうか。それは語り得る命題と語り得ない命題との間の境界線である。語り得る命題は自然科学の命題だけであるから、自然科学の命題とその他の命題との間の境界線である。この境界線により、語り得るものと語り得ないものとを明確に分けることが、哲学の役割だとするのである。すなわち哲学の役割は、言語批判になるのである。哲学の役割は、命題から語り得ないものを取り去り、命題を明晰化することなのである。

ウィトゲンシュタインは、今までの哲学は語り得ないものを語ってきたという。哲学の大部分は、無意義なものであったという。だが語り得るものはすべて自然科学のものであった。語り得るものは、すべて自然科学が語ってしまうのである。すると哲学に残されるものは、語り得ないものになってしまう。哲学は、語り得ないものをいかに語るのだろうか。ウィトゲンシュタインは、語り得るものを明晰に語ることにより、語り得ぬものを示すのだという。哲学は、思考し得るものを明晰に思考することにより、思考し得ぬものを限界づけるのだという。このようにウィトゲンシュタインは、語り得るものと語り得ぬものを、明確に分けようとする。語り得るものを通して、語り得ぬものを示そうとするのである。語り得るものは、明確に語り得るといふ。語り得るものに対する問いには、明確に答え得るといふ。語り得るものについては、謎はないという。この様な性格を持つ語り得るものを語ることを通して、哲学は語り得ぬものを示すのだというのである。

この様に哲学の対象は、語り得ぬものなのである。だが語り得ぬものは、やはり語り得ぬものである。語り得ぬものを対象とする哲学は、学として成り立つのだろうか。ウィトゲンシュタインは、哲学の本来の姿は、語り得るものについてのみ語り、語り得ぬものについては語らぬことだといふ。語り得ぬものについて語らぬとすれば、哲学は学として成り立たぬことになる。ウィトゲ

ンシュタインは、哲学の最終的な目的は、哲学の考察を通して、哲学を無意義と悟らせることだというのである。哲学の最終的な目的は、哲学を拒否することなのである。しかしながら現在の社会では、語り得ないものが語られている。語り得ないものを語る人々に、語られていることが無意義であると教えること、これが現段階の哲学の目的だというのである。「蠅に蠅取壺からの抜け道を教えること」、これが哲学の現段階の目的である。そうして「語り得ぬことについては沈黙すること」、これが最終的な目的なのである。

5. ウィトゲンシュタインによる科学の総合

前節に述べたウィトゲンシュタインの科学像を整理すると次のようになろう。

論理学は、論理形式の学であった。論理形式は、最も根源的な模写形式であって、諸命題による記述の条件となるものであり、人間の思考の枠組を決定するものであった。それは、語り得るものではなく、示されるものであった。語り得るものを語る諸命題の中において、あるいは人間の思考が展開する思考過程の中において、示されるものであった。それは、恒真命題としてその内容が示されるものでもあるが、事象を記述する諸命題の中において、あるいは思考対象を巡って展開する思考過程の中において、自らを自ら現わしているものであった。すなわち論理学は、語り得るものではなく、語り得るものの中に自らを示しているもの、を対象とする学なのである。

また、数学は、論理学と同じく、模写形式の学であった。数は、経験的事物から抽象されるものではなく、経験的事物を模写する形式なのである。三という数は、三冊の本、三本の鉛筆、三個のりんごから抽象されるものではなく、これらの事物を捉える形式なのである。従って数学の内容は、論理学と同じく、語られ得ぬものとなる。だが数学は、等号で表わされる形式を扱う点で、論理学と違っている。数学は、異なる操作を等号で等しいとし、気づかぬ形式の構造を示すのである。また数学の証明は、論理学の証明と違って、現実の変化の比較対象となる。数学の証明は、現実の変化の範型となって、現実の見渡しを可能にするのである。数学は、現実と対応づけられ、人間の役に立つのである。

一方、自然科学・物理学は、経験的事実の学、すなわち語り得るものの学であった。自然科学のみが、事実について語るのであり、世界についての知識を与えるのである。自然科学のみが、論理学・数学が用意する形式に、内容を与えるのである。自然科学のみが、論理学・数学の無意義な命題を、有意味な命題にするのである。だが自然科学の法則は、語り得るものの法則である故、すなわち経験的事実に対する法則である故、確実性を持たぬものとなる。自然科学の命題は、すべて事実との対応によって真偽が決まる。事実との対応によって初めて真となる。すなわち自然科学には、確実な法則は存在しないのである。絶対的確実性は、論理学・数学の中にのみ、在るのである。

倫理学・人間学は、「私」を主題とする学である。倫理学・人間学は、いかなる位置を占めるのか。倫理学・人間学は、語り得ぬものの学であった。だが論理学における語り得ぬものが、論理形式として命題の中に示されたのに対して、倫理学・人間学の語り得ぬものである「私」は、命題の境界として命題の外に示される。倫理学・人間学の主題である「私」は、私の命題・私の世界として、命題あるいは世界の外部に、超越的なものとして示されるのである。また世界を記述する命題は、すべて等価値であった。すなわち命題は人間の行為を指示できず、倫理学は成立しないことになる。それでも倫理学が存在するとすれば、それは語り得るものを越えた超越的なものであるに違いない。倫理学・人間学は、超越的な語り得ぬものの学なのである。

最後に、哲学は言語批判の学であった。哲学は、命題から語り得ぬものを除去し、語り得るものだけを明晰に語る命題に改造する学なのである。哲学は、語り得るものを明晰に語ることによって、語り得ぬものを境界・限界として示す学なのである。語り得るものには謎も神秘もなく、語り得るものは明晰に語り得るから、語り得るものを語ることを通して、語り得ぬものを示そうとする学なのである。これまでの哲学の命題の殆どは、語り得ぬものに関する命題であり、これを語り得るものだけの命題として、語り得ぬものに固有の位置を与える。これが哲学の現段階の役割である。だが語り得るものを語るのは、自然科学の役割である。また語り得ぬものについては、沈黙せねばならない。すな

わち哲学は、語るべきものを持たず、最終的には、破棄すべきものとなるのである。

以上の整理から分かるように、ウィトゲンシュタインによる科学の分類すなわち科学の総合は、語り得るもの・語り得ぬものの観点から、行われていることが理解できよう。論理学は、語り得るものを語る記述形式の中の、最も根源的な論理形式の学である。数学は、この記述形式の中の、数と等号を使用する形式の学である。自然科学は、語り得るものの学であり、経験的事実を記述する学である。倫理学・人間学は、この語り得るものの境界あるいは彼方にある、語り得ぬものの学である。一方、哲学は、命題から語り得ぬものを取り除き、語り得るものを明晰に語る命題とする学である。すなわち、語り得るもの、語り得ぬもの、語り得るものを語る形式、語り得るものと語り得ぬものを区別する操作の、それぞれを対象とする科学として、自然科学、倫理学・人間学、論理学・数学、哲学が位置づけられていることが理解できよう。ウィトゲンシュタインは、これらを明確に区分すると共に、これらには固有の性格があると主張する。語り得るものは、自然科学だけの対象であり、経験的事実と対応するものであるから、絶対的确实性を持たない。語り得ぬものは、倫理学・人間学の対象であって、語り得るものを越えた超越的なものであり、人間の行為の中にあるものである。語り得るものを語る形式は、論理学・数学の対象であり、語り得るものを語る命題の中に示されるものであるが、経験的事実とは関連がなく、絶対的确实性が宿る領域である。語り得るものと語り得ぬものの区別は、哲学の仕事であり、これが遂行された後、哲学は不必要となるのである。この様にウィトゲンシュタインによる科学の総合は、命題を明晰に語るための命題構造の分析、言語を浄化するための言語活動の分析から成り立っているのである。

6. ウィトゲンシュタインによる総合の特色

この様にウィトゲンシュタインは、人間の言語表現の解析を通して、科学の総合を行ったといえよう。人間の言語表現には、語り得るもの、語る形式、語

り得ぬもの、語るものから語り得ぬものの除去、の四つの要素があるが、これらの各々の要素を扱う科学が、自然科学、論理学・数学、倫理学・人間学、哲学なのである。だがウィトゲンシュタインは、これらの四つの要素を同列に論じたのではなかった。語る形式すなわち記述形式の学である論理学・数学については詳細に論じられるが、自然科学、倫理学・人間学、哲学については、論理学・数学の議論の中で、付随的に論じられるに過ぎないのである。すなわちウィトゲンシュタインによる科学の総合は、記述形式の学である論理学・数学を核とする科学の総合なのである。記述形式の学である論理学・数学は、経験に依存せぬ先験的なもの故、絶対的確實性を持つものである。記述形式があるならば、記述されるものがなければならぬ。それが語り得るもので、自然科学が対象とするものである。語り得るものは、経験と対応するものであるから、経験との対応によって真偽が決まり、絶対的確實性を持たないものである。一方、記述形式によって記述し得ないものがある。それは、記述形式そのものと、語り得ないものである。記述形式は、命題によって記述されるものではなく、命題によって示されるものである。語り得ないものは、語り得るものと記述形式以外のものである。それは、自然科学と論理学・数学以外の諸学が対象とするものである。それは、経験との対応を越えた、超越的なものである。だが、通常の記述においては、この様な明確な区別はない。語り得ぬものと記述形式は、語り得るものの如く語られている。ここに語り得るものだけを語る記述の純化が必要となる。この記述の純化を行うのが哲学である。哲学は、語り得るもの、語り得ぬもの、記述形式を区別する役割を持つのである。この様に、ウィトゲンシュタインによる科学の総合は、明晰な言語表現のための記述形式の議論を介しての、諸科学の固有の位置づけによる総合といえるのである。

この総合の特色は、ウィトゲンシュタインが、物理学をモデルとして、言語表現の解析を行ったことを示しているのではないか。物理学は、物体の運動を正確に記述し、惑星の軌道を正確に予測する。すなわち客観的事実を明晰に語る科学である。そこには個人的願望・主観的虚構・超越的観念は含まれない。この物理学の記述は、ウィトゲンシュタインが理想とした記述、すなわち語り

得るものだけを語り、語り得ぬものには沈黙する記述、ではないか。ウィトゲンシュタインは、物理学の記述を念頭に、言語表現の解析を目指したのではないか。物理学の記述の特色は数学の使用にある。数学の使用によって物理学は、客観性・正確性・明晰性を得るのである。この物理学の特色が、ウィトゲンシュタインに、論理学・数学の記述形式を核として、言語表現を解析させたのではないか。物理学の記述においては、語り得るものすなわち自然と、記述形式すなわち数学と、語り得ぬものすなわち主観的なものが、截然と分れている。この事実が、ウィトゲンシュタインに、語り得るもの、語り得ぬもの、および記述形式を明確に区別させたのではないだろうか。

それでは、ウィトゲンシュタインによる科学の総合は、他の科学の総合といかなる違いを持つのだろうか。ウィトゲンシュタインによる総合を、ヘーゲル、コント、フッサール、およびピアジェによる総合と比較してみよう。ヘーゲルは、本稿の初めに述べた様に、社会および人間と関連づけて具体的に事象を把握する手法が総合であるとし、この総合観から諸科学は、論理学—自然哲学（自然科学）—精神哲学（人文社会科学）の順序で総合度が増すとし、総合度が高い科学は総合度の低い科学を説明するとしたのだった。社会学者A. コントによる科学の総合は、ヘーゲルの総合に似ているといえよう。コントは、ヘーゲルと同じ様に事象を具体的に記述する科学が総合的であるとして、数学—天文学—物理学—化学—生物学—社会学の順序で総合度が增大するとするが、社会の問題を具体的に解決する総合度の高い科学は総合度の低い科学の上に成立し、諸科学は総合度の低い科学から高い科学へと発達するとする⁸⁴⁾のである。フッサールは、本稿の初めに述べた様に、諸科学は自らの成立基盤を見失っている、諸科学は生活世界の上に成り立つ、生活世界は時間性・身体性・相互主観性の属性を持つ、従って諸科学のすべては時間性・身体性・相互主観性の属性を持つ、の論法から諸科学を基礎づける形で総合したのであった。また心理学者J. ピアジェは、物理学は物理現象を数学で理解しようとする、数学は論理学によって基礎づけられる、人間の論理的振舞は心理学・社会学によって説明される、心理現象・社会現象は生物現象に還元される、生物学は自らを物理学に還元し

ようとする、という諸科学間の関連から、物理学—数学—論理学—心理学・社会学—生物学—物理学の諸科学の円環構造を主張するのである。⁸⁵⁾

これらの科学の総合と比較すると、ウィトゲンシュタインの総合は、次の特色を持つのではないか。ヘーゲルとコントの総合は、具体的に事象を記述する科学を総合度が高いとする故、科学の応用性・実用性の観点からの総合といえよう。科学が社会の具体的問題を解決するためには、あるいは科学が事象を具体的に記述するためには、科学の対象についての様々な知識が必要となる、すなわち様々な科学的知識の総合が必要となる。ヘーゲルとコントの総合は、この種の総合ではないのか。一方、フッサールとピアジェの総合は、科学の基礎づけによる総合、他の領域への科学の還元による総合、といえるのではないか。ある科学の事象を、他領域の事象への還元によって、統一的に理解することは、科学の事象を総合的に理解することなのである。フッサールは、諸科学の基礎づけを現象学の非科学領域に求めた結果、諸科学の成立基盤を明らかにしたのに対し、ピアジェは、諸科学の基礎づけを科学領域に求めた結果、諸科学の円環構造という諸科学の相互依存関係を得たのである。ウィトゲンシュタインの総合は、この二つの形態に総合を分類すると、前者に属するのではないか。ウィトゲンシュタインは、事象を明晰に記述するという観点から、記述に関与する要素を明確に区分けしたのである。事象の記述という人間の行為を、首尾よく具体的に遂行するために、記述が関与する要素を、語り得るもの、語り得ぬもの、記述の形式、語るものから語り得ぬものの除去に分け、それぞれを対象とする科学に、自然科学、倫理学・人間学、論理学・数学、哲学を割り当てたのである。自然科学、倫理学・人間学、論理学・数学、哲学が、相互に独立な固有の機能を持ち、それぞれの科学がそれぞれの機能を果たすときにのみ、完全な事象の記述が可能だと主張するのである。ウィトゲンシュタインは、事象の記述という人間の行為が、適切に機能するためのシステム作りを遂行した、といえるのではないだろうか。

このウィトゲンシュタインの総合の性格は、生地ウィーンで思索を開始した動機にあるのではないか。ウィトゲンシュタインが青春期を過ごしたウィーン

は、ハプスブルグ朝の滅亡期にあって、多様な価値観が渦巻き、無意義で実態のない言葉が飛び交っていたという⁸⁶⁾。主観的願望にすぎない言葉が、客観的真理のごとく語られていたという。語り得ないものが、語り得るもののごとく、語られていたという。ウィトゲンシュタインは、この様な言語状況に、激しい憤りを感じたのだった。言語が表わすものは、個人的虚構ではなく、経験的事実でなければならない。人間は、語り得るものだけを、明晰に語らねばならない。語り得ぬものについては、沈黙しなければならない。語り得ぬものについては、言語による記述以外の手法で、示さなければならない。ウィトゲンシュタインは、この様な動機から、言語分析を行ったのではないか。そうして人間の言語活動を規定する不可欠な要素として、語り得るもの、語り得ぬもの、記述形式、言語批判があるとし、これらを対象とする自然科学、倫理学・人間学、論理学・数学、哲学が本来の機能を果たすときにのみ、社会で語られる言葉に信頼性と確実性が回復すると主張するのである。ウィトゲンシュタインの思想は、ウィーンの病的な言語表現システムを改善するための、システム分析であるといえるのではないだろうか。

参考文献

- 1) ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』, 7節.
- 2) 坂恒夫「行動のための科学の総合」一般教育学会誌(第14巻, 第1号, 1992年).
- 3) 坂恒夫「ヘーゲルによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要(第3号, 1991年).
- 4) 坂恒夫「フッサールによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要(第4号, 1992年).
- 5) ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』, 4.1212節.
- 6) ウィトゲンシュタインの生涯については、次の文献を参考にした。
黒崎宏「ウィトゲンシュタインの生涯」(『ウィトゲンシュタイン全集』大修館書店(1975年)の別冊付録)。
ノーマン・マーコム等『放浪・回想のウィトゲンシュタイン』(藤本隆志訳)法政大学出版局(1971年)。
ヴフタール、ヒュブナー『ウィトゲンシュタイン入門』(寺中平治訳)大修館書店(1981年)。
- 7) ウィトゲンシュタインの思想については、次の文献を参考にした。
アンソニー・ケニー『ウィトゲンシュタイン』(野本和幸訳)法政大学出版局(19

82年).

黒田巨編『ウィトゲンシュタイン』平凡社(1978年).

山元一郎、石本新「三人の科学哲学者」(山元一郎編『ラッセル・ウィトゲンシュタイン・ホワイトヘッド』平凡社(1980年)に収録).

- 8) ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』, 6.1節.
- 9) 文献 8), 6.11節.
- 10) 文献 8), 6.113節.
- 11) 文献 8), 6.1222節.
- 12) 文献 8), 6.121節.
- 13) 文献 8), 6.124節.
- 14) 文献 8), 6.1251節.
- 15) 文献 8), 6.126節.
- 16) 文献 8), 6.1262節.
- 17) 文献 8), 6.1264節.
- 18) 文献 8), 6.1265節.
- 19) 文献 8), 6.127節.
- 20) 文献 8), 6.13節.
- 21) 文献 8), 6.2節.
- 22) 文献 8), 6.2節.
- 23) 文献 8), 6.2341節.
- 24) 文献 8), 6.2節.
- 25) 文献 8), 6.21節.
- 26) 文献 8), 6.22節.
- 27) 文献 8), 6.24節.
- 28) ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』.
- 29) ウィトゲンシュタイン『哲学的考察』, 108節.
- 30) ウィトゲンシュタイン『数学の基礎』, 1部153節.
- 31) 文献30), 2部24節.
- 32) 文献30), 2部71節.
- 33) 文献30), 2部31節.
- 34) 文献28).
- 35) ウィトゲンシュタイン『哲学的文法』, 2部.
- 36) 文献35), 2部.
- 37) 文献30), 1部167節.
- 38) 文献30), 5部15節.
- 39) 文献 8), 4.11節.
- 40) 文献 8), 5.1361節.
- 41) 文献 8), 5.6331節.

- 42) 文献 8), 6.3節.
- 43) 文献 8), 6.31節.
- 44) 文献 8), 6.32節.
- 45) 文献 8), 6.34節.
- 46) 文献 8), 6.341節.
- 47) 文献 8), 6.343節.
- 48) 文献 8), 6.3431節.
- 49) 文献 8), 6.36節.
- 50) 文献 8), 6.3611節.
- 51) 文献 8), 6.363節.
- 52) 文献 8), 6.371節.
- 53) 文献 8), 6.375節.
- 54) 文献 8), 5.62節.
- 55) 文献 8), 5.621節.
- 56) 文献 8), 5.63節.
- 57) 文献 8), 5.631節.
- 58) 文献 8), 5.632節.
- 59) 文献 8), 6.373節.
- 60) 文献 8), 6.4節.
- 61) 文献 8), 6.42節.
- 62) 文献 8), 6.421節.
- 63) 文献 8), 6.421節.
- 64) 文献 8), 6.43節.
- 65) 文献 8), 6.431節.
- 66) 文献 8), 6.4311節.
- 67) 文献 8), 6.4311節.
- 68) 文献 8), 6.4312節.
- 69) 文献 8), 6.521節.
- 70) 文献 8), 4.003節.
- 71) 文献 8), 4.0031節.
- 72) 文献 8), 4.112節.
- 73) 文献 8), 4.112節.
- 74) 文献 8), 4.113節.
- 75) 文献 8), 4.114節.
- 76) 文献 8), 4.115節.
- 77) 文献 8), 5.641節.
- 78) 文献 8), 6.5節.
- 79) 文献 8), 6.522節.

- 80) 文献 8), 6.53節.
- 81) 文献 8), 6.54節.
- 82) 文献 8), 7節.
- 83) ウィトゲンシュタイン『哲学探究』, 1部309節.
- 84) 坂恒夫「コントによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要(創刊号, 1989年).
- 85) 坂恒夫「ピアジェによる科学の総合」岐阜薬科大学教養科紀要(第2号, 1990年).
- 86) トゥールミン, ジャニック『ウィトゲンシュタインのウィーン』(藤村龍雄訳) TBSブリタニカ(1992年)